

研究・調査報告書

報告書番号	担当
1 9 3	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳) Heavy drinking occasions and depression. 多量飲酒の機会と抑うつ状態	
執筆者 Manninen L, Poikolainen K, Vartiainen E, Laatikainen T.	
掲載誌 (番号又は発行年月日) Alcohol Alcohol 2006; 41(3):293-9.	
キーワード 多量飲酒の機会、抑うつ状態、飲酒量	
要 旨 背景 多量飲酒とうつ状態との関連は多くの研究で指摘されているが、飲酒パターンとうつとの関連は明らかではない。単純に平均飲酒量を用いると、毎日平均的に飲んでいる者とたまに多量に飲む者が同じグループに分類される場合もあるが、両者を等価と考える根拠は乏しい。	
対象と方法 1997年にフィンランドの5地域に居住する25～64歳の住民を無作為抽出し3124人を研究対象者とした。過去長期間の平均的な飲酒量を問診で求めた。多量飲酒の機会とは、男性では一度に6 drinks以上、女性では4 drinks以上と定義した（この研究では1 drinkは約12グラムの純アルコール）。21項目のBeck Depression Inventoryスコアで10点以上を抑うつ状態と定義した。多量飲酒の機会と抑うつ状態の関連を、飲酒量、年齢、性別、婚姻状態、就業状況、慢性的な疾患の有無を調整して検討した。	
結果 平均飲酒量で見ると、非飲酒者に比し、禁酒者とハイリスク飲酒者（純エタノール換算して男性で週350グラム、女性で210グラム以上）では抑うつ状態ありのリスクが高かった。また多量飲酒の機会がある者はない者に比し、男女とも抑うつ得点が高かった。また年齢が高いほど抑うつ状態ありの頻度が高かった。45～64歳の多量飲酒機会のある男性は多量飲酒機会のない25～34歳の男性に比し、平均飲酒量を含む他の交絡要因を調整しても有意に2.3倍（95%信頼区間1.6-3.5）抑うつ状態ありの頻度が高かった。このリスクは女性では1.9倍（95%信頼区間1.1-3.1）であった。	
結論 平均飲酒量にかかわらず、多量飲酒の機会は抑うつ状態と関連することが示唆された。	